

モンゴルとの外交関係樹立—経緯と今日的意義

花田麿公

日本、モンゴルを通じて、外交関係樹立交渉に関係した者は報告者ただ1人となったので、本稿は研究者、インフォーマント両方の立場で発表する。

戦前帝国主義的勢力圏確定のための日露秘密協約の時代、モンゴルと直接接触はなかった。旧満州とモンゴルとの国境紛争で、日露満モが戦ったノモンハン事件（ハルハ川戦争）のとき、その停戦協定に日満露モが調印したが国家承認はなかった。

1957年、モンゴルは日本との外交関係樹立の意思表示をするが、モンゴルの国際的地位に疑義があり、また、ソ連の1945年8月9日対日宣戦布告（モンゴルは10日）により、ソ連軍とともに対日軍事行動で戦争状態を主張していたので、日本側は関係改善の意思がなかった。

1961年、モンゴルが国連加盟するに及び、各国に動きがあった。おりしも中ソ対立の開始等があり、オブザーベーション・ポストとしての価値が高まったので、1961年秋、2名の外務省員を派遣したが、単なる観光客としての旅行に終わり、墓参も許されなかったので、日本は、接触はするが検討はしないという空白時期に入った。

1965年、モンゴルで開催された国連セミナーのおり、派遣した2名がモンゴル側の真意を聴取して帰国、翌1967年に派遣された墓参団のとき2名の外務省員を派遣して交渉を開始した。戦争状態による賠償問題と戦後の日本人抑留問題等がネックになり、交渉は膠着状態となった。1970年の万博のとき国交なくもモンゴル代表団を外務省賓客で招待し、翌年モンゴル側が日本親善施設団を招いたことが打開のもとになり、1971年2月外交関係が樹立された。

本年は50周年にあたる。現在、北東アジアにおいてモンゴルのみが日本の真の友好国であるといえる。1971年、ダルハンで小学生が日本とは？との質問に「敵」と答えた時代とは隔世の感がある。次の50年には、モンゴルが苦労に苦労を重ねて勝ち取った一国非核地帯（南半球は全部非核地帯）は北東アジアでは貴重である。日本も唯一の被爆国としてモンゴルとともに未来を見たいものだ。